

メティチ家殺人事件

塩野七生



塩野七生

メデイチ家殺人事件

朝日新聞社

メデイチ家殺人事件

一九九〇年一月二十日第一刷発行
一九九〇年三月十五日第四刷発行

著 者 塩野七生

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行人 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二

電話 〇三-五四五-〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇-一七三〇

©Nanami Shiono 1990 Printed in Japan

ISBN4-02-256062-2

※定価はカバーに表示してあります

メデイチ家殺人事件 ● 目次

聖ミケーレ修道院^{サン} 9

イリスの香り 21

半月館^{メッザ・ルナ} 34

メデイチ家の人々 46

晩秋の一日 59

監獄・バルジェツロ 70

硬石の器 82

一つの考え 96

皇帝の間諜^{スパイ} 109

刑場の朝 122

トレツピオの山荘 133

家族の団欒 146

ラファエツロの首飾り 158

冬晴れのフィレンツェ 169

『プリマヴェーラ』（春） 182

フィレンツェ魂 193

陰謀の解剖学 アナトミア 205

壁の中の道 217

反メデイチの若き獅子

228

糸杉の道 240

反逆天使 251

遠方の光 263

アルト・ラルノの向こう 275

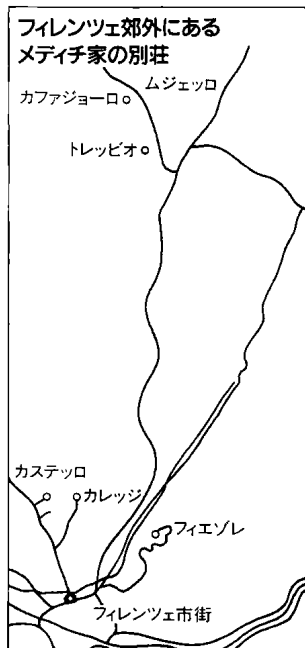
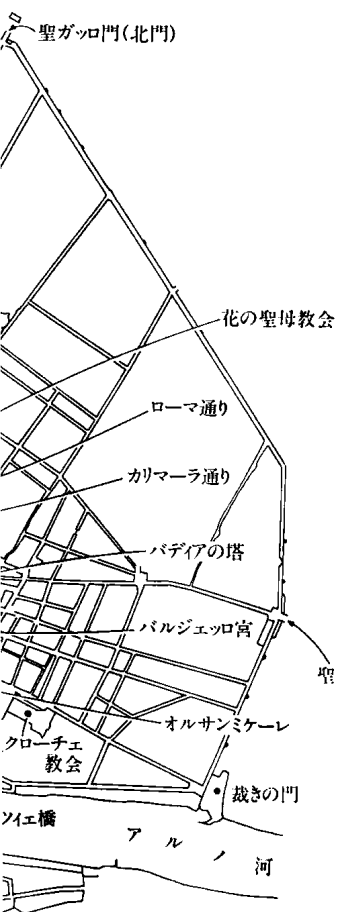
エピファニアの夜 288

二人のマキアヴェリスト

エピローグ 313

301

装画・安久利 徳
装幀・多田 進

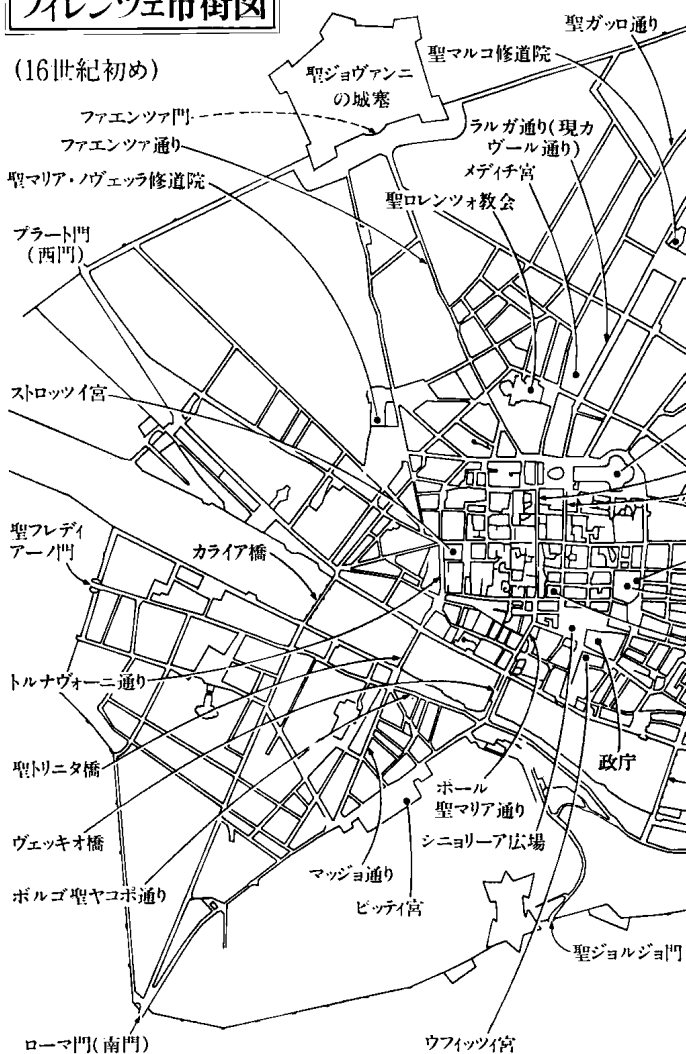


聖クローチェ門(東門)

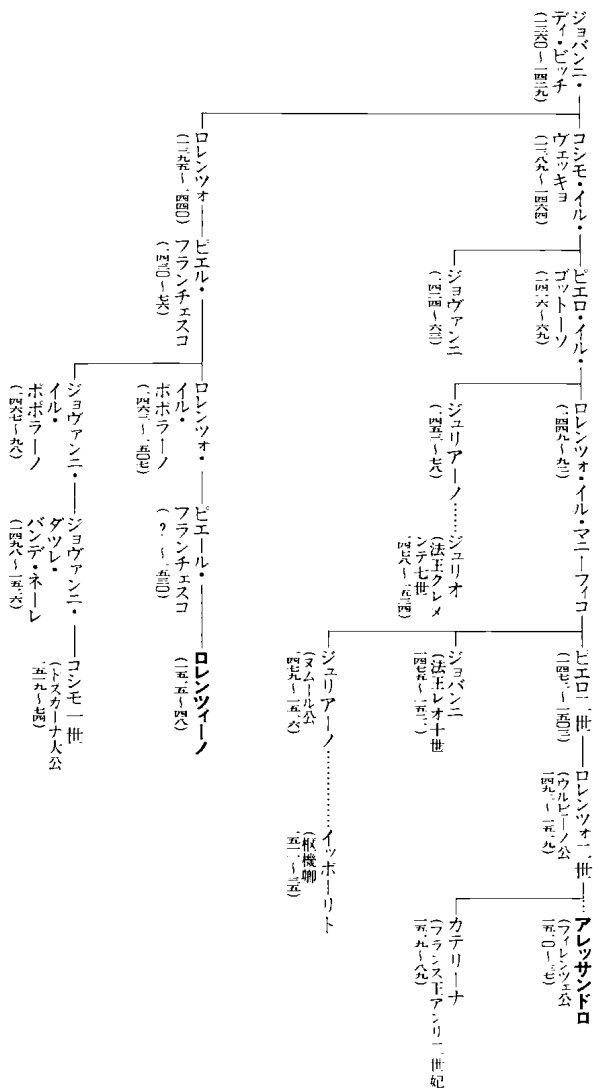
0 100 500m

フィレンツェ市街図

(16世紀初め)



…… 庶子
(一)は生没年



メデイチ家殺人事件

『週刊朝日』一九八九年二月十日号から同年八月十一日号まで連載

聖^{サン}ミケーレ修道院

男たちは三人とも、百姓姿に身をやつしていた。服だけでなく、百姓が野良で働くときにかぶる粗布あらめのずきんの頭巾を深くかぶっている。ろばに引かせた荷車の上には、収穫したばかりの葡萄ぶどうが山積みされているのか、荷車全体をおおった粗布の下から葡萄の葉が見え隠れする。荷車は、百姓の一人が鍵で開けた山莊グイッラの門を入っていった。

林の中の曲がりくねった道の行きどまりに、山莊の入り口がある。その厚い木の扉も、百姓の一人の慣れた手つきで簡単に開いた。

あたりは、午後の静けさを破る人影もない。三人の男は荷車のおおいを取り、葡萄の山の下から何かを引き出した。二人が、それを前後からかかえて中庭に入る。先導するのは、それまで鍵を開ける役だったもう一人の男だ。中庭がつきたところにある扉も、この男が開ける。三人の男たちは、地下に降りていった。

粗布でつつんだ物体を運んでいた二人のうちの一人が、先導の男に声をかけた。

「お頭、ここじゃあすぐにも見つかつてしまいますぜ」

「かまわぬ、ここへ捨ておけと言われたのだ」

粗布でつつんだまま、運ばれてきた物体はそこにおかれた。そこは、地下室といってもどこにでもある普通の地下室ではない。周囲の壁一面が貝殻かいがらで敷き詰められていて、その一面には小さな噴水まである。ただ、水はとまっていた。それでも、海底にでもいるかのような不思議な雰囲気ふしぎなふしぎなが漂う。粗布でつつまれた物体は、海底に沈められた水葬遺体を思わせないでもなかった。

はじめに口をきった男が、もう一度声をかけた。

「ほんとうに誰もいないんですかい」

お頭と呼ばれた男は、うるさそうに答える。

「明日までは誰もいない。召使たちは皆、カファジョーロの山荘の葡萄摘みの手伝いに行っていて、明日にならなければ帰ってこない。老人が一人残っているが、ここまでは見まわりにこないと聞いた」

外に出た三人の男たちは、再び荷車を引き、山荘の門を出る。出会ったのは、樹々の間を愉たのし気に飛びかう、小鳥の群れだけだった。

道を急いでいれば、日のあるうちに聖ガッロ^{サシ}の城門を通過していたにちがいないのだ。

聖ガッロ^{サシ}の城門は、北からの旅人ならば誰でも通らねばならない、フィレンツェの街全体をかこむ市壁の北側に開いた門である。ただ、晩鐘を合図に閉じられてしまう。

だが、マルコは旅を急いではいなかった。

三年間の公職追放の処分をうけてから、まだ一年しかたっていない。ヴェネツィア共和国の元老院議員であっただけでなく、かの国の外政と防衛の事実上の最高決定機関である「C・D・X（十人委員会）」の一員として、密命をおびてヴェネツィアとトルコの首都コンスタンティノープルの間を往復していた頃とは、今のマルコ・ダンドロの立場は完全にちがっていた。

重要な公務にたずさわる者だけに政府が発行する、特別身分証明書に守られた身分ではない。ヴェネツィア共和国が主な他国には必ず常駐させている、在外公館の誰かの出迎えも期待できなかった。

しかし、それは、旅の終わりに待っていた任務もないということである。

旅を急ぐ必要もなく、着いてからも待ちかまえている仕事のない旅は、マルコにとって今回はじめてなのであった。

一私人としての旅の目的地をフィレンツェと決めたのには、深い理由があったわけではない。

まず何よりも、ヴェローナの山荘での静かな毎日に厭あきてしまったのだ。公職を追放された当時はあれほどにも欲していた心身との休養だったのに、一年もたてば、四十にはまだ間のある男の肉体は我慢できなくなっていた。

といつて、ヴェネツィアでの社交生活を愉しむ気にもなれない。昔からマルコは、華やかなだけの生活にひかれたことはなかった。

第二の理由といえるようなものは、それぞれに独立した国家ではあつても言語や風習ならば同じの、イタリアを知らないことに気づいたからである。西はイギリスから東はトルコまで知っているマルコなのに、フィレンツェにもローマにも行ったことがない。時間はありあまつている今こそ、その不足をおぎなうには最適の時期に思えた。

まったく、ヴェネツィアの貴族に生まれ、国政を担当するのが当然の義務と思つて暮らしてきたマルコのような男は、漫然とした旅というものを知らないで過ごしてしまう。若者の頃の旅は知識と経験の修得が目的なのだし、その後になれば公務の出張ばかりになる。行けと言われたところに旅するので、自分で行き先を選べるわけではない。

自分で行き先を選べる旅は、世捨て人にだけ許される贅ぜいたく沢と思つていたが、今のマルコの立場も、世捨て人といえないこともないのだった。公職追放期間の三年が終われば、今の状態も終わるのか。それとも、三年が過ぎた後もこのままの人生がつづくのか。それはマルコの決めること

ではなかった。

しかし、少なくともこの数年は、完全な私人なのである。イタリアを見にでも行ってくるか、とマルコの心は動いたのである。

フィレンツェを最初の目的地に決めたのは、関心の流れにごく自然に従った、とでも言うしかない。

ヴェネツィアにいて思うフィレンツェは、同じイタリアとはいっても、まったく反対の性格をもつ二人の人間のように思えるのだ。それがためか、ドイツやフランスの人たちは、しばしばこの二つの国を比較して話す。そして、一家門のみが權勢を謳歌^{おうか}することを許さない制度に慣れたヴェネツィア人の眼には、フィレンツェのメディチ家の突出^{とつと}ぶりが奇異に映るのだった。マルコも、ちがうがゆえに興味をそそられる一人だったのである。

フィレンツェは、ヴェネツィア共和国の市民であるマルコにすれば外国だが、それでも同じイタリアの中の一国だから、トルコに旅するときのような、相手国の通行並びに滞在のための許可証までは必要でない。ヴェネツィアの街の住人ならば、自分の住む行政区^{セステリエ}の居住証明書と、それともう一つ、属する教区^{パロコ}の司祭のくれる証明書で充分だ。政府の発行する特別身分証明書をもたされていた当時はそれだけでこと足り^たていたのだが、私人の身分でも、この二つは必要だった。

行政区の発行する証明書は、ヴェネツィア共和国の市民であることを証明する。各国におかれた大使館や領事館、それに在外経済機関と呼んでもよい商館には、これをもつ者の保護が義務づけられていた。言ってみれば、^{パスポート}旅券である。

教区の証明書のほうはカトリック教徒であることの証明なのだが、これには意外と実用価値があった。設備の整った旅宿のない地方を旅していれば、やむをえず僧院に宿を乞ねばならないことも多い。修道院は、キリスト教徒でないと泊めないのだ。快適な旅宿など、他国人との交流の多い大都市にしか望めない時代、宿泊先としての僧院は、旅人にはなかなか重宝な存在であった。

それに、旅先で病気になることだってある。公営の病院はこれまた大都市だけのもので、他はほとんど僧院の診療所が代行していた。

宿泊も治療も、もともとが巡礼たちのための思ってもうけられた制度だが、キリスト教徒であれば貧富を問わず受け入れていたのだ。ホスピタルの語源からして、もてなすとか受け入れるとかを意味する動詞からきている。

この二つの証明書の他に、マルコはもう一通の書状をもっていた。教区の司祭が書いてくれた、^{サン}ミケーレ修道院の院長にあてた手紙である。

「なにかのときにお役に立てば」